

グリーフ（悲嘆）ケアの知識や技能を身につけ、実践していくこととも言える。

学びを身につける上で最も有効な動機付けが、自己課題のための自発的動機であるならば、教師自身の関心の高いものの学びを提供することが、教師の資質向上において効率的と言えるのではないだろうか。

以上、一次報告では行なわなかった集計をQ6からQ11まで行い、また過去に行なわれたアンケートや啓発を参照しながら、まとめを行なった。クロス集計は、すべての属性で行なったわけではないが、いくつかの変化を見出し、新たな視点を得ることが出来た。過去の資料を参照することで、直接的ではないにしろ、悲嘆を抱える者に対しての、本宗教師の対応や意識の変化を垣間見ること出来たのではないだろうか。

終わりに、本アンケート実施に際して、貴重なご意見をお寄せいただいた回答者の方々に、深甚なる謝意を申し上げる。

(48) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

僧侶が遺族の悲しみに十分に寄り添っていない現状から、むしろ葬祭業者が遺族のグリーンケアの担い手となりはじめています。

とある。

実際に、葬祭業者に向けてグリーンケアの学びを提供し、資格を設けている団体がある。一般財団法人・冠婚葬祭文化振興財団のグリーンケア士、株式会社ジーエスアイのグリーンサポートボディなど、10年以上行なわれているものもあるようで、葬祭ディレクターとともに持つておきたい資格の一つとも認識されているようである。

僧侶よりも、葬祭業者の方がグリーンケアの知識や経験を持って、遺族に寄り添っているという状況が、すでに起こっているのか、近い未来に起こる可能性があるのかもしれない。

10年以上前と比べても、僧侶の「寄り添う」「話を聞く」「気持ちを聴く」ことへの意識も、様々な啓発によって高まっていると言えるのではないだろうか。

本アンケートにおいて、「今、世間から求められている僧侶の重要な資質や能力」と認識しながら、自身や次世代の僧侶にとって、学ぶ機会がない、学ぶ機会が少ないと感じているものを抽出すると、その上位は、

「悩み相談への対応力」

「死別など様々な悲嘆への理解力・対応力」

「多様な価値観への理解力」

「宗教者としての倫理観」

「多様な病や障害への理解力」

「社会課題への対応力・実践力」

となった。

「死別など様々な悲嘆への理解力・対応力」は、換言すれば、死別における

僧侶は、まず遺族や相談者の気持ちに寄り添って、共に悲しみ、ときには沈黙し、ときには話を聞き、徐々に信頼関係を築き、そこで初めて真実の法を説くことができるのではないだろうか。そのプロセスなしに、「話をする」教師が多いとすれば、注意を要すると思われる。

今回PTで行なったアンケートは、平成21年に行なわれた「[いのちの活動]に関するアンケート」を意識して作成したものではないが、類似した内容から、15年ほど前の教師と、現在の教師の意識差が確認できるのではないだろうか。そしてそれは、上記のような注意喚起によってもなされていったものと考えられる。

また、日蓮宗現代宗教研究所では平成23年7月16日にブックレット『葬儀の心～青年僧のために』を発行し、配布した。

ブックレットでは、グリーフ（悲嘆）ケアとしての葬儀の意義を取り上げて記述している。

常日頃、生前から、檀信徒に寄り添い、人間的な関わりを深めて行く中で、信頼関係が構築されるのであり、そうした心の繋がりの上に初めて本当の死者の供養と遺族のグリーフワークへの援助、すなわちグリーフケアが可能になるのです。

また、

通夜や葬儀は本来、故人の成仏の為の儀式であり、布教のために用意された時間ではありません。遺族の心情を思いやりながら、独善的な物言いにならないよう心がけ、教えの押し付けにならないように配慮しましょう。

(中略)

(46) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

割であった。

また、

「これまでに「死にたい」「自殺したい」という相談を受けたことがありますか」（設問Ⅳ－１）との質問に対して、「はい」は33.0%、（中略）対応の内容に関する記述（設問Ⅳ－１）を分析すると、「アドバイスをする」「信仰を説く・霊的指導をする」など説法に近い対応が4割弱、「話を聞く・寄り添う」は2割強、「実際の対応をする」は3%程度であった。

と報告されている。

説法に近い対応がやや多く、「寄り添う・話を聞く」という対応も多くて4割ほどとなっていたようである。

今回PTで行なったアンケートでは、質問の仕方が違うものの、遺族の悲嘆に寄り添えたと感じる対応として、「法話を行なった時」は全体の38.2%、「遺族の気持ちを聴いた時」は全体の83.2%となっており、約15年を経て、「寄り添う・話を聞く」という対応が増えたように感じられる。

「いのちの活動」に関するアンケート」報告書では、上記のような結果を受けて、以下のような注意喚起をしている。

説法やアドバイスは、話をする側の僧侶の価値観を押し付けることになりかねない。死ぬしかないと思うほどに追い詰められた故人の苦しみや、大切な人を亡くした遺族の喪失感を静かに受け止めることなく、一方的に経文やマニュアルに書かれていることを話されても、不安と不信感を募らせ、かえって遺族の反発を受けることにもつながりかねない。

以上のように、Q11の回答数と割合を、年代別、住職・非住職別、性別、地域別に見てきた。最も多様な変化が見られたものは年代別の表であった。他の属性においてもいくつかの変化が見られるものの、大きな変化は年代によるものと思われる。また、すべての属性で最も多くの割合となる回答は、「遺族の気持ちを聴いた時」であった。

ここで試みに、過去に行なわれた類似のアンケートを参照してみたい。

平成21年1月から2月にかけて、宗門運動本部企画推進会議（いのちの活動プロジェクト）を実施主体として行なわれた「いのちの活動」に関するアンケートがあり、『現代宗教研究』第44号に報告書が掲載されている。このアンケートは、平成18年の「自殺対策基本法」制定、平成19年の「自殺総合対策大綱」策定といった社会状況と、平成19年度から実働を開始した宗門運動「立正安国・お題目結縁運動」の中で、人びとの「いのち」にやさしく寄り添い、抜苦与楽を具現するとの基本目標の一つを受け、常不輕菩薩の但行礼拜の実践として、自殺対策に積極的に取り組むこととなったことを背景として、日蓮宗教師の自死問題に対する認識と取り組みの現状を把握し、今後の方策を検討することを目的として実施された。

宗報にアンケートが同封され、4,819ヶ寺に発送し、回答数が1,017通であったという。

当然、同じ内容のアンケートではない為、単純には比較できないが、上記のアンケートに興味深い結果があり、報告書の中から抜粋する。

「自死者の遺族に対して、精神的ケアを考慮して特別な対応をしていますか」（設問Ⅲ－6）との問いに対して、「対応している」は27.4%であった。その具体的な記述には、「アドバイス・励まし」「教えを説く」「供養する」といった内容が約3割、「寄り添う・話を聞く」という内容は約4

(44) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

地域別 ※全体の割合と比較して5%以上の変化のみ色をつける。

	全体 (262回答)	市街地 (107回答)	郊外1 (99回答)	郊外2 (56回答)
仏教の教えを伝えた時	42 (16%)	15 (14%)	18 (18.2%)	9 (16.1%)
荘厳な法要を務めた時	59 (22.5%)	25 (23.4%)	20 (20.2%)	14 (25%)
法話を行なった時	100 (38.2%)	35 (32.7%)	37 (37.4%)	28 (50%)
世間話をして笑い合った時	72 (27.5%)	23 (21.5%)	31 (31.3%)	18 (32.1%)
遺族の気持ちを聴いた時	218 (83.2%)	93 (86.9%)	81 (81.8%)	44 (78.6%)
十分に寄り添えたと感じることはなく模索している	70 (26.7%)	35 (32.7%)	28 (28.3%)	7 (12.5%)

「仏教の教えを伝えた時」、「荘厳な法要を務めた時」、「遺族の気持ちを聴いた時」では大きな変化は見られない。

「法話を行なった時」は、市街地（住宅や産業が比較的集中している）地域では5.5%下がり、郊外2（市街地から遠く離れ、住宅や産業はまばら）地域では11.8%上がっている。

「世間話をして笑い合った時」は、市街地で6%下がっている。

「十分に寄り添えたと感じることはなく模索している」は、市街地で6%上がり、郊外2で14.2%下がっている。

「法話を行なった時」は、市街地から離れるにつれ増加傾向が見られる。

「十分に寄り添えたと感じることはなく模索している」は、市街地に近くなるにつれ増加傾向が見られる。

人口の集中による価値観の多様化が影響しているとも考えられる。人口の集中する市街地では、価値観の多様化が顕著となり、対応を模索する割合が増える。反対に、郊外にいくほど価値観の多様化が緩やかとなり、法話によって寄り添えたと感じる割合が多く、対応を模索する割合は減る。Q6とQ7の考察でも、郊外2では「法話」の学習ニーズが多く出ており、法話への関心が高い。

「遺族の気持ちを聴いた時」では、市街地に近くなるにつれ、回答の割合が増加傾向にある。

性別 ※全体の割合と比較して5%以上の変化のみ色をつける。

	全体 (262回答)	男性 (230回答)	女性 (26回答)	無回答 (6回答)
仏教の教えを伝えた時	42 (16%)	37 (16.1%)	5 (19.2%)	0 (0%)
荘厳な法要を務めた時	59 (22.5%)	55 (23.9%)	3 (11.5%)	1 (16.7%)
法話を行なった時	100 (38.2%)	90 (39.1%)	8 (30.8%)	2 (33.3%)
世間話をして笑い合った時	72 (27.5%)	62 (27%)	8 (30.8%)	2 (33.3%)
遺族の気持ちを聴いた時	218 (83.2%)	189 (82.2%)	23 (88.5%)	6 (100%)
十分に寄り添えたと感じることはなく模索している	70 (26.7%)	61 (26.5%)	8 (30.8%)	1 (16.7%)

男性では、大きな変化は見られない。

「仏教の教えを伝えた時」は、性別無回答で、回答者がいなかった。

「荘厳な法要を務めた時」は、女性で11%、無回答で5.8%下がっている。

「法話を行なった時」は、女性で7.4%下がっている。

「世間話をして笑い合った時」は、無回答で5.8%上がっている。

「遺族の気持ちを聴いた時」は、女性で5.3%、無回答で16.8%上がっている。

「十分に寄り添えたと感じることはなく模索している」は、無回答で10%下がっている。

女性・無回答では、「仏教の教えを伝えた時」、「荘厳な法要を務めた時」、「法話を行なった時」に減少傾向、「世間話をして笑い合った時」、「遺族の気持ちを聴いた時」に増加傾向が見られる。

次に、地域別で示した表が以下である。

(42) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

瞬間が多くなり、模索も少なくなっている。ただし70代以上では、通常の法務を行なうことに寄り添えたと感じる瞬間は多いままだが、「世間話をして笑い合った時」が7.7%と最も少なくなり、模索している割合が増える。

次に、住職・非住職別で示した表が以下である。

住職・非住職別 ※全体の割合と比較して5%以上の変化のみ色をつける。

	全体 (262回答)	住職 (住職・担任・教導) (176回答)	非住職 (修徒・寄在) (86回答)
仏教の教えを伝えた時	42 (16%)	33 (18.8%)	9 (10.5%)
荘厳な法要を務めた時	59 (22.5%)	40 (22.7%)	19 (22.1%)
法語を行なった時	100 (38.2%)	79 (44.9%)	21 (24.4%)
世間話をして笑い合った時	72 (27.5%)	50 (28.4%)	22 (25.6%)
遺族の気持ちを聴いた時	218 (83.2%)	148 (84.1%)	70 (81.4%)
十分に寄り添えたと感じることはなく模索している	70 (26.7%)	36 (20.5%)	34 (39.5%)

「荘厳な法要を務めた時」、「世間話をして笑い合った時」、「遺族の気持ちを聴いた時」では大きな変化はない。

「仏教の教えを伝えた時」は、非住職で5.5%下がっている。

「法語を行なった時」は、住職で6.7%上がり、非住職で13.8%下がっている。

「十分に寄り添えたと感じることはなく模索している」は、住職で6.2%下がり、非住職で12.8%上がっている。

住職・非住職別で見ると、年代別で見た方が、変化が大きく出ている。Q11における意識差は、住職・非住職別よりも、年代別の方が大きいと言える。

次に、性別で示した表が以下である。

年代別の割合で見ると、「仏教の教えを伝えた時」は、20代で8.3%、30代で5.6%下がり、60代で12.6%、70代以上で10.9%上がっている。

「荘厳な法要を務めた時」は、20代で14.8%、30代で6.9%下がり、70代以上で7.5%上がっている。

「法話を行なった時」は、20代で30.5%、30代で6.9%下がり、60代で26.6%、70代以上で8%上がっている。

「世間話をして笑い合った時」は、20代で12.1%、70代以上で19.8%下がり、50代で10%上がっている。

「遺族の気持ちを聴いた時」は、20代で6.3%下がっている。

「十分に寄り添えたと感じることはなく模索している」は、50代で5.4%、60代で21.9%下がり、20代で27.1%、30代で17.1%、70代以上で15.6%上がっている。

「仏教の教えを伝えた時」、「荘厳な法要を務めた時」、「法話を行なった時」といった通常の法務ともいえる項目は、20代・30代の若年層で減少傾向、60代・70代以上の高年齢層で増加傾向が見られる。

「法話を行なった時」は、60代で最も割合が増加し、54.8%となっている。

「世間話をして笑い合った時」は、20代と70代以上で減少傾向、50代で増加傾向となっている。

「遺族の気持ちを聴いた時」は、全年齢で最も割合が高いが、20代で減少傾向となっている。

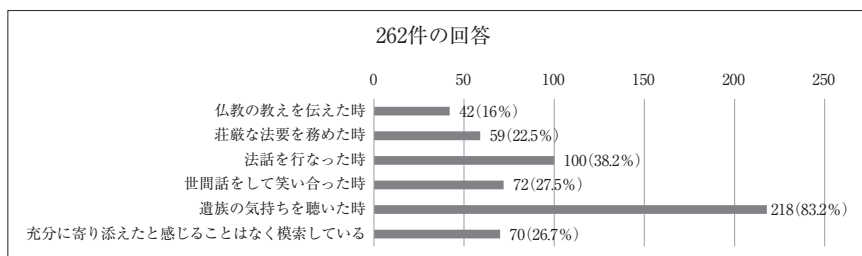
「十分に寄り添えたと感じることはなく模索している」は、50代・60代で減少傾向、20代・30代・70代以上で増加傾向となっている。60代では最も低く、4.8%となっている。

比較的若年層では、寄り添えたと感じる瞬間は少なく、模索している傾向がある。高年齢層になるにつれ、通常の法務を行なうことに寄り添えたと感じる

(40) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

る機会が多くあるものと想定し、どのようなことを行った際に、僧侶自身が、遺族に寄り添えたと感じているのかを6つの選択肢を設けて質問した。以下が、質問文と全体での回答結果である。

Q11、僧侶は、葬儀や法事場で、死別による悲嘆を抱えた遺族と接する機会が多くあります。遺族の悲嘆に寄り添えたと感じる瞬間はどのような時ですか？（3つまで選択可）



上記の質問は、様々な属性によっても変化が見られることが考えられ、年代別、住職・非住職別、性別、地域別で示し、考察する。

年代別 ※全体の割合と比較して5%以上の変化のみ色をつける。

	全体 (262回答)	20代 (13回答)	30代 (32回答)	40代 (69回答)	50代 (80回答)	60代 (42回答)	70代以上 (26回答)
仏教の教えを伝えた時	42 (16%)	1 (7.7%)	3 (9.4%)	9 (13%)	10 (12.5%)	12 (28.6%)	7 (26.9%)
荘厳な法要を務めた時	59 (22.5%)	1 (7.7%)	5 (15.6%)	17 (24.6%)	18 (22.5%)	10 (23.8%)	8 (30%)
法話を行なった時	100 (38.2%)	1 (7.7%)	10 (31.3%)	26 (37.7%)	28 (35%)	23 (54.8%)	12 (46.2%)
世間話をして笑い合った時	72 (27.5%)	2 (15.4%)	9 (28.1%)	18 (26.1%)	30 (37.5%)	11 (26.2%)	2 (7.7%)
遺族の気持ちを聴いた時	218 (83.2%)	10 (76.9%)	28 (87.5%)	58 (84.1%)	67 (83.8%)	34 (81%)	21 (80.8%)
十分に寄り添えたと感じることはなく模索している	70 (26.7%)	7 (53.8%)	14 (43.8%)	19 (27.5%)	17 (21.3%)	2 (4.8%)	11 (42.3%)

次に、住職・非住職別で見た回答数と割合が以下である。

住職・非住職別 ※全体の割合と比較して5%以上の変化のみ色をつける。

	全体 (262回答)	住職 (住職・担任・教導) (176回答)	非住職 (修徒・寄在) (86回答)
自己課題のための自発的動機	203 (77.5%)	131 (74.4%)	72 (83.7%)
教師資格取得のための義務的動機	58 (22.1%)	46 (26.1%)	12 (14%)
資格更新のための義務的動機	59 (22.5%)	40 (22.7%)	19 (22.1%)
学ぶことによって宗門から特典が付与される	61 (23.3%)	40 (22.7%)	21 (24.4%)
師僧や寺族、周囲の教師からの勧め	45 (17.2%)	23 (13.1%)	22 (25.6%)

非住職は年齢層が低いため、「自己課題のための自発的動機」、「師僧や寺族、周囲の教師からの勧め」の割合が高くなっていると言えよう。

「教師資格取得のための義務的動機」は、非住職で8.1%下がっている。比較的、教師資格取得のための課程を経て間もないと思われる非住職において、最も低い回答数となっている。

比較的間近に、教師資格取得のための義務的課程を経た非住職（修徒・寄在）が、その義務的動機を選択肢の中で最も有効とっていないと言える。現状の義務的課程が、少なくとも受講者にとって有効であったとされていないとすると、今以上に教師資格取得のための義務的課程を増やすことは、学習効果を高める上で有効とは考えにくいと言えよう。

Q11の考察（年代別、住職・非住職別、性別、地域別）

Q11は、僧侶が、葬儀や法事の場面で、死別による悲嘆を抱える遺族と接す

(38) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

年代別 ※全体の割合と比較して5%以上の変化のみ色をつける。

	全体 (262回答)	20代 (13回答)	30代 (32回答)	40代 (69回答)	50代 (80回答)	60代 (42回答)	70代以上 (26回答)
自己課題のための自発的動機	203 (77.5%)	12 (92.3%)	27 (84.4%)	50 (72.5%)	63 (78.8%)	31 (73.8%)	20 (76.9%)
教師資格取得のための義務的動機	58 (22.1%)	3 (23.1%)	6 (18.8%)	16 (23.2%)	18 (22.5%)	8 (19%)	7 (26.9%)
資格更新のための義務的動機	59 (22.5%)	4 (30.8%)	7 (21.9%)	17 (24.6%)	16 (20%)	9 (21.4%)	6 (23.1%)
学ぶことによって宗門から特典が付与される	61 (23.3%)	3 (23.1%)	6 (18.8%)	15 (21.7%)	22 (27.5%)	9 (21.4%)	6 (23.1%)
師僧や寺族、周囲の教師からの勧め	45 (17.2%)	3 (23.1%)	8 (25%)	10 (14.5%)	12 (15%)	9 (21.4%)	3 (11.5%)

全体の割合と比較して5%以上の変化が見られるのは6カ所であった。

「自己課題のための自発的動機」は、20代で14.8%、30代で6.9%上がっている。

「資格更新のための義務的動機」は、20代で8.3%上がっている。

「師僧や寺族、周囲の教師からの勧め」は、20代で5.9%、30代で7.8%上がり、70代以上で5.7%下がっている。

その他の箇所には大きな変化は見られない。

「自己課題のための自発的動機」は、20代と30代で顕著に割合が高くなっており、若い世代ほど、自発的動機が学びを身につけていく上で最も有効だと思う傾向が強いと言える。ただし20代については、「資格更新の義務的動機」も3割ほどの教師が有効だと思っている。

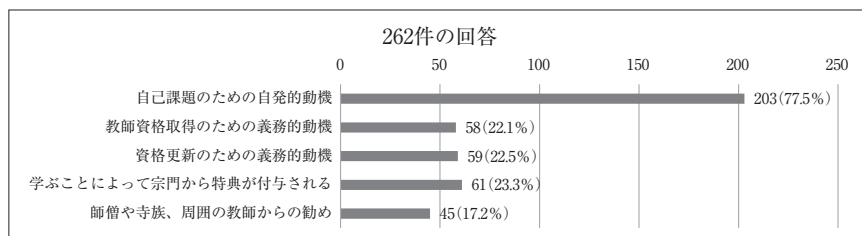
「師僧や寺族、周囲の教師からの勧め」は、20代と30代で割合が上がり、70代以上で下がっている。若い世代は自分自身の得手不得手や課題を見つける途上でもあると考え、周囲からの勧めも一定程度有効と思う傾向があるのかもしれない。

気にせず繰り返し学習出来るアーカイブ配信や、オンラインを活用することで移動時間をなくし、日中を避けた時間帯に開催するなどといった対応によって、学習意欲や学習頻度の増加が見込めるかもしれない。

Q9の考察（年代別、住職・非住職別）

Q9は、「どのような動機付けが、学びを身につけていく上で最も有効だと思いますか？（2つまで選択可）」として、5つの選択肢を設けて質問した。全体での回答数と割合は以下である。

Q9、どのような動機付けが、学びを身につけていく上で最も有効だと思いますか？（2つまで選択可）



上記の質問は、年代別や住職・非住職別で意識差があると考えられるため、以下に表を示し、考察する。

(36) 学習機会に関するアンケート（グリーンフェアPT）

での講義」ニーズが最も多い回答となるのは、郊外1のみであった。

次に、Q10の地域別での回答数と割合を以下に示し、全体の割合と比較して5%以上の変化のみ色をつける。

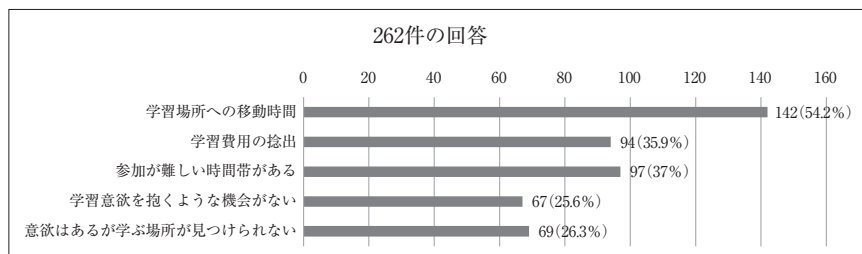
	全体(262回答)	市街地(107回答)	郊外1(99回答)	郊外2(56回答)
学習場所への移動時間	142 (54.2%)	54 (50.5%)	61 (61.6%)	27 (48.2%)
学習費用の捻出	94 (35.9%)	42 (39.3%)	31 (31.3%)	21 (37.5%)
参加が難しい時間帯がある	97 (37%)	38 (35.5%)	37 (37.4%)	22 (39.3%)
学習意欲を抱くような機会がない	67 (25.6%)	29 (27.1%)	24 (24.2%)	14 (25%)
意欲はあるが学ぶ場所が見つけれない	69 (26.3%)	29 (27.1%)	25 (25.3%)	5 (26.8%)

「学習場所への移動時間」が学習のさまたげとなる割合は、市街地では大きな変化はなく、郊外1で7.4%上がり、郊外2で6%下がる。「対面での講義」ニーズと対応していると考えられよう。

その他の項目では、大きな変化は見られない。しいて言えば、市街地で唯一「学習費用の捻出」が2番目に多い回答数となる。学習機会の多くが、市街地において提供されていると考えると、参加頻度が高くなる市街地において「学習費用の捻出」が比較的さまたげとなりやすいのかもしれない。

以上、Q8とQ10の回答数を地域別で概観した、多少の変化があるものの、地域によって大きな差は見られないと言える。「オンラインでの講義」のニーズが高いことや、「学習場所への移動時間」がさまたげとなる理由は、単純に市街地への距離が関係するのではなく、おそらく「忙しさ」という要素も関係していると考えられる。法務や会議、付き合いや兼業などによっても、時間を取られることが避けられているのではないだろうか。自由意見においても、兼業によって時間が取れないという意見や、教区・管区の行事や事務が多いとの意見も確認出来る。現状でそれらの要素の解決が困難であるならば、時間帯を

Q10、学習を継続していく上でどのようなことが、さまたげになると感じますか？（2つまで選択可）



Q8で最も多い回答は「オンラインでの講義」、Q10で最も多い回答は「学習場所への移動時間」であった。どちらも、距離を問題としていると推察出来るため、それぞれの質問を地域別の回答数で示し、考察する。

Q8の地域別での回答数と割合は以下である。全体の割合と比較して5%以上の変化のみ色をつける。

	全体(262回答)	市街地(107回答)	郊外1(99回答)	郊外2(56回答)
対面での講義	150 (57.3%)	60 (56.1%)	62 (62.6%)	28 (50%)
オンラインでの講義	165 (63%)	71 (66.4%)	58 (58.6%)	36 (64.3%)
対面での実習	123 (46.9%)	53 (49.5%)	44 (44.4%)	26 (46.4%)
オンラインでの実習	53 (20.2%)	23 (21.5%)	19 (19.2%)	11 (19.6%)
読書など個人的に	90 (34.4%)	37 (34.6%)	33 (33.3%)	20 (35.7%)

「オンラインでの講義」のニーズが、市街地から離れるほどに高まるかと予想されたが、地域別で大きな差はないと言える。また他の項目についても地域別で大きな差は見られない。しいて全体の割合と比較して5%以上の変化を示したものは、郊外1（市街地から比較的近いが、人口は減少傾向）地域で、「対面での講義」のニーズが5.3%上がる。また、郊外2（市街地から遠く離れ、住宅や産業はまばら）地域で、「対面での講義」のニーズが7.3%下がる。「対面での講義」のニーズは、市街地から少し離れた地域ではニーズが高まり、市街地から遠く離れるとニーズが下がるという傾向のようである。また、「対面

(34) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

を間近に見聞きする内に「宗教者としての倫理観」への学習ニーズが高まるのかもしれない。

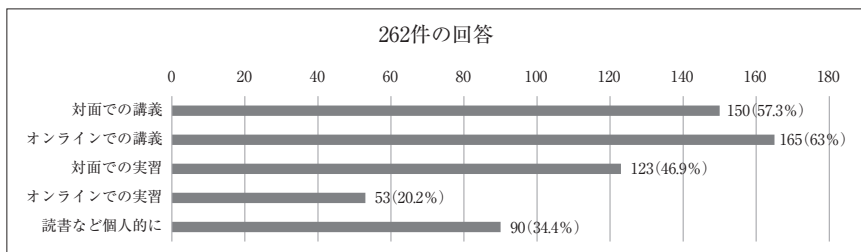
また「法話」は、女性、郊外2に比較的多くの学習ニーズが確認出来た。

Q8、Q10の考察（地域別）

Q8は、「どのような学習機会において学びたいと思いますか？（3つまで選択可）」として、対面やオンライン、講義や実習、読書といった学習機会について質問した。

Q10は、「学習を継続していく上でどのようなことが、さまたげになると感じますか？（2つまで選択可）」として、5つの選択肢を設けて質問した。以下が、全体での回答数と割合である。

Q8、上記に回答したものを、どのような学習機会において学びたいと思いますか？（3つまで選択可）



地域別（郊外2（市街地から遠く離れ、住宅や産業はまばら）、回答数56）

1	悩み相談への対応力	39	30	- 9	23.1%
2	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	36	24	- 12	33.3%
3	法話	34	20	- 14	41.2%
3	一般常識・社会人マナー	34	18	- 16	47.1%
7	多様な価値観への理解力	28	20	- 8	28.6%
8	教学の応用力	24	18	- 6	25.0%
8	多様な病や障害への理解力	24	19	- 5	20.8%

市街地（住宅や産業が比較的集中している）地域では、「宗教者としての倫理観」の回答群が中位から上位へと変動している。

郊外1（市街地から比較的近いが、人口は減少傾向）地域では、「教学の知識・実践力」が中位回答群として上がってきている。

郊外2（市街地から遠く離れ、住宅や産業はまばら）地域では、「宗教者としての倫理観」と「社会課題への対応力・実践力」が表に残らず、「法話」「一般常識・社会人マナー」が上位回答群として上がり、「教学の応用力」が中位回答群として上がっている。

要素別の各表を概観すると、変化の大きかった項目として「宗教者としての倫理観」が上げられよう。この項目は、他の要素と比して30代・40代・50代、男性、非住職、市街地に多くの学習ニーズが確認出来る。

市街地では、比較的飲食店や遊興施設が多くあり、飲食や遊興の機会が多いと考え、宗教者としての倫理観が問われる、または自問する場面が多いのかもしれない。自由意見の中には、僧侶の遊興や派手な消費による「逆布教（寺院離れをおこさせる行動）」によって人から信頼されないことが問題だと指摘する意見や、一般人のように活動する中で僧侶に対する苦言をたくさん聞くとの意見もある。そのような行動をする僧侶は一部であろうが、それらの行動

(32) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

男性では、「宗教者としての倫理観」の回答群が中位から上位へと変動している。

女性では、「多様な価値観への理解力」と「多様な病や障害への理解力」が表に残らず、「法話」が中位回答群として上がってきている。

性別無回答者では、「多様な価値観への理解力」と「多様な病や障害への理解力」が表に残らず、「他宗教の実態や動向についての知識」と「法人運営の知識」が中位回答群として上がっている。

「宗教者としての倫理観」について、住職（住職・担任・教導）では表に残らず、男性では回答群が中位から上位へと変動していることは興味深いと言える。

次に、地域別で作成した表が以下である。

地域別（市街地（住宅や産業が比較的集中している）、回答数107）

1	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	86	52	-34	39.5%
2	悩み相談への対応力	82	52	-30	36.6%
4	宗教者としての倫理観	76	40	-36	47.4%
7	多様な病や障害への理解力	69	44	-25	36.2%
8	多様な価値観への理解力	68	44	-24	35.3%
9	社会課題への対応力・実践力	67	53	-14	20.9%

地域別（郊外1（市街地から比較的近いが、人口は減少傾向）、回答数99）

2	悩み相談への対応力	71	41	-30	42.3%
3	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	69	46	-23	33.3%
5	多様な価値観への理解力	62	42	-20	32.3%
7	社会課題への対応力・実践力	55	45	-10	18.2%
8	多様な病や障害への理解力	52	31	-21	40.4%
9	宗教者としての倫理観	50	32	-18	36.0%
10	教学の知識・実践力	44	28	-16	36.4%

住職（住職・担任・教導）では、「宗教者としての倫理観」が表に残らず、「教学の知識・実践力」が中位回答群として上がっている。

住職（住職・担任・教導）は年齢層が高いため、「宗教者としての倫理観」への学習ニーズの低下が起こり、「教学の知識・実践力」の学習ニーズが上がってきていると考えられる。

非住職（修徒・寄在）は、年齢層が低いため、「一般常識・社会人マナー」への学習ニーズが上がっていると考えられる。

次に、性別で作成した表が以下である。

性別（男性、回答数230）

1	悩み相談への対応力	167	109	-58	34.7%
2	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	165	106	-59	35.8%
5	宗教者としての倫理観	139	74	-65	46.8%
7	多様な価値観への理解力	136	96	-40	29.4%
8	社会課題への対応力・実践力	130	103	-27	20.8%
9	多様な病や障害への理解力	124	82	-42	33.9%

性別（女性、回答数26）

1	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	22	13	-9	40.9%
2	悩み相談への対応力	21	11	-10	47.6%
7	宗教者としての倫理観	15	11	-4	26.7%
8	法話	14	8	-6	42.9%
10	社会課題への対応力・実践力	10	12	+2	20.0%

性別（無回答、回答数6）

3	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	4	3	-1	25.0%
3	社会課題への対応力・実践力	4	4	0	0.0%
3	悩み相談への対応力	4	3	-1	25.0%
7	他宗教の実態や動向についての知識	3	5	+2	66.7%
7	宗教者としての倫理観	3	2	-1	33.3%
7	法人運営の知識	3	2	-1	33.3%

(30) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

70代以上では、「多様な価値観への理解力」、「宗教者としての倫理観」が表に残らず、「教学の応用力」が上位回答群、「教学の知識・実践力」が中位回答群として上がり、「社会課題への対応力・実践力」が回答群で中位から上位となって最も高い学習ニーズを示している。教学の応用や、社会課題への対応・実践に最も意識の高い世代と言えよう。

年代別に表を作成しても、高い学習ニーズが消えないものは、「悩み相談への対応力」、「死別など様々な悲嘆への理解力・対応力」、「多様な病や障害への理解力」であった。

次に、住職・非住職別（住職・担任・教導と、修徒・寄在）で作成した表が以下である。

住職・非住職別（住職・担任・教導、回答数176）

2	悩み相談への対応力	125	83	-42	33.6%
3	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	124	80	-44	35.5%
5	多様な価値観への理解力	101	76	-25	24.8%
7	社会課題への対応力・実践力	95	81	-14	14.7%
9	多様な病や障害への理解力	90	60	-30	33.3%
10	教学の知識・実践力	79	41	-38	48.1%

住職・非住職別（修徒・寄在、回答数86）

1	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	67	42	-25	37.3%
1	悩み相談への対応力	67	40	-27	40.3%
3	一般常識・社会人マナー	65	37	-28	43.1%
6	宗教者としての倫理観	58	38	-20	34.5%
7	多様な価値観への理解力	57	30	-27	47.4%
8	多様な病や障害への理解力	55	34	-21	38.2%
9	社会課題への対応力・実践力	49	38	-11	22.4%

また、「一般常識・社会人マナー」が、20代・30代・50代で、上位回答群として表に上がっている。

「法人運営の知識」は、20代・30代で、中位回答群として表に上がっている。

「教学の応用力」は、30代と60代で中位回答群として表に上がり、70代以上で上位回答群として表に上がっている。

「教学の知識・実践力」は、50代と70代以上で中位回答群として表に上がっている。

20代・30代では、「一般常識・社会人マナー」と「法人運営の知識」が表に上がってきており、それぞれの学習ニーズが高い時期と考えられる。

40代は、二番目に回答数が多く、全体と比較しても大きな変化は見られない。

50代は、最も回答数が多く、全体での表の各項目に加えて、「一般常識・社会人マナー」と「教学の知識・実践力」が表に上がっている。「一般常識・社会人マナー」については次世代（20代・30代）への学習ニーズとしての表れとも考えられる。

60代は、「宗教者としての倫理観」が表に残らず。「教学の応用力」が表に上がっている。

「宗教者としての倫理観」と「一般常識・社会人マナー」は、ともに社会的規範についての項目と言えるが、「宗教者としての倫理観」は、20代・60代・70代以上で表に残らず、30代・40代・50代では変動していない。「一般常識・社会人マナー」は、20代・30代・50代で、上位回答群として表に上がっている。若い世代ほど「一般常識・社会人マナー」への学習ニーズが高く、それが30～50代にかけて「宗教者としての倫理観」へと学習ニーズが変化し、60代・70代以上になるにつれ学習ニーズが下がっていくと考えられるのではないだろうか。

(28) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

年代別（60代、回答数42）

2	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	30	22	- 8	26.7%
4	悩み相談への対応力	26	17	- 9	34.6%
6	多様な価値観への理解力	24	20	- 4	16.7%
8	社会課題への対応力・実践力	22	16	- 6	27.3%
9	教学の応用力	21	16	- 5	23.8%
10	多様な病や障害への理解力	19	11	- 8	42.1%

年代別（70代以上、回答数26）

2	社会課題への対応力・実践力	18	17	- 1	5.6%
5	教学の応用力	17	14	- 3	17.6%
5	悩み相談への対応力	17	11	- 6	35.3%
7	教学の知識・実践力	16	12	- 4	25.0%
7	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	16	12	- 4	25.0%
7	多様な病や障害への理解力	16	12	- 4	25.0%

上記の表の特徴は、

「悩み相談への対応力」は、20代で回答群が上位から中位となっており、その他の年代では変動しない。

「死別など様々な悲嘆への理解力・対応力」は、70代以上で回答群が上位から中位となっており、その他の年代では変動しない。

「多様な価値観への理解力」は、20代と50代で回答群が中位から上位になっており、30代と70代以上では表に残らず、40代と60代では変動しない。

「宗教者としての倫理観」は、20代・60代・70代以上で表に残らず、30代・40代・50代では変動しない。

「多様な病や障害への理解力」は、20代と50代で回答群が中位から上位になっており、その他の年代では変動しない。

「社会課題への対応力・実践力」は、70代以上で回答群が中位から上位になっており、30代では表に残らず、その他の年代では変動しない。

年代別（30代、回答数32）

1	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	29	16	-13	44.8%
2	一般常識・社会人マナー	24	13	-11	45.8%
3	悩み相談への対応力	23	14	-9	39.1%
6	多様な病や障害への理解力	21	12	-9	42.9%
8	宗教者としての倫理観	19	14	-5	26.3%
10	教学の応用力	15	12	-3	20.0%
10	法人運営の知識	15	17	2	13.3%

年代別（40代、回答数69）

1	悩み相談への対応力	56	37	-19	33.9%
3	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	47	30	-17	36.2%
6	宗教者としての倫理観	42	25	-17	40.5%
6	社会課題への対応力・実践力	42	34	-8	19.0%
9	多様な価値観への理解力	38	28	-10	26.3%
10	多様な病や障害への理解力	34	24	-10	29.4%

年代別（50代、回答数80）

1	悩み相談への対応力	61	39	-22	36.1%
2	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	58	36	-22	37.9%
3	一般常識・社会人マナー	57	33	-24	42.1%
4	多様な価値観への理解力	49	27	-22	44.9%
5	多様な病や障害への理解力	45	28	-17	37.8%
8	宗教者としての倫理観	41	22	-19	46.3%
9	社会課題への対応力・実践力	39	33	-6	15.4%
10	教学の知識・実践力	31	18	-13	41.9%

(26) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

「今、世間から求められている僧侶の重要な資質や能力」と認識されながら、自身や次世代の僧侶にとって、学ぶ機会がない、学ぶ機会が少ないと感じているものについて、学習機会が求められていると考えた。

1～5を上位回答群、6～10を中位回答群、11～15を下位回答群として分け、上位～中位回答群（順位1～10）の内、割合が50%以下のもの（学習機会が少なく感じられているもの）を抜き出すと以下となった。

1	悩み相談への対応力	192	123	-69	35.9%
2	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	191	122	-69	36.1%
6	多様な価値観への理解力	158	106	-52	32.9%
7	宗教者としての倫理観	157	87	-70	44.6%
8	多様な病や障害への理解力	145	94	-51	35.2%
9	社会課題への対応力・実践力	144	119	-25	17.4%

上記の表をまとめとして、これらは全回答者の内73.3%～55%の回答者が、「今、世間から求められている僧侶の重要な資質や能力」と認識しながら、学びの機会がない・少ないと感じており、学習機会がさらに求められていると言え、各項目について、継続的な学習機会の提供が課題になると結論づけた。

さらに、同じ作業を年代別、住職・非住職別、性別、地域別の要素に分けて行い、以下にその表を示し、全体からまとめた上記の表を基に考察する。

年代別（20代、回答数13）

1	一般常識・社会人マナー	13	9	-4	30.8%
3	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	11	6	-5	45.5%
4	多様な価値観への理解力	10	8	-2	20.0%
4	多様な病や障害への理解力	10	7	-3	30.0%
7	社会課題への対応力・実践力	9	7	-2	22.2%
7	悩み相談への対応力	9	5	-4	44.4%
9	法人運営の知識	7	6	-1	14.3%

3	多様な価値観への理解力	158	106	-52	32.9%
4	宗教者としての倫理観	157	87	-70	44.6%
5	多様な病や障害への理解力	145	94	-51	35.2%
6	社会課題への対応力・実践力	144	119	-25	17.4%

これらの回答に対応する意見として、注目出来るものと考えられる。

Q6－Q7回答数での考察 (年代別、住職・非住職別、性別、地域別)

一次報告では、Q6とQ7の回答数の差と割合を比較し、考察を行った。

Q6、「今、世間から求められている僧侶の重要な資質や能力とはどのようなものだと思いますか？（複数回答可）」を回答数の多い順に並べ、Q7、「それらの資質や能力のうち、あなた自身が、または次世代の僧侶にとって、学ぶ機会がない、学ぶ機会が少ないと感じるものはどれですか？（複数回答可）」の回答数を横に配置、Q6－Q7の回答数の差を出し、その差がQ6の回答数に対してどのような割合であるかを示す表を作成し以下ようになった。

Q6回答数順	Q6回答数	Q7回答数	差	Q6回答数 に対する 差の割合	
1	悩み相談への対応力	192	123	-69	35.9%
2	一般常識・社会人マナー	191	93	-98	51.3%
2	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	191	122	-69	36.1%
4	法話	171	63	-108	63.2%
5	仏教の知識	159	46	-113	71.1%
6	多様な価値観への理解力	158	106	-52	32.9%
7	宗教者としての倫理観	157	87	-70	44.6%
8	多様な病や障害への理解力	145	94	-51	35.2%
9	社会課題への対応力・実践力	144	119	-25	17.4%
10	教学の知識・実践力	127	61	-66	52.0%
11	教学の応用力	117	88	-29	24.8%
12	法人運営の知識	97	100	+3	3.1%
13	法式執行	85	24	-61	71.8%
14	ご祈祷	80	28	-52	65.0%
15	他宗教の実態や動向についての知識	73	100	+27	37.0%

(24) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

は、学習場所への移動時間（142回答、54.2%）であり、参加が難しい時間帯がある（97回答、37%）が二番目となっている。学習がオンラインでも可能であれば、時間の取られる移動をすることなく行うことが出来る。講義動画のアーカイブ配信を行うならば、本人の受講しやすい時間に各自受講することが出来る。「教育や学習機会に関する意見」の中に、兼業をする教師にとって平日の日中は参加することが難しいとの指摘もある。法務を専らにする教師においても、学習時間を確保することは容易なことではないと考えられる。

学習の義務に関する意見や、更新制度の導入に関する意見もあるが、Q9の学びを身につけるのに最も有効な動機付けを問う質問では、自己課題のための自発的動機（203回答、77.5%）、教師資格取得のための義務的動機（58回答、22.1%）、資格更新のための義務的動機（59回答、22.5%）となっており、義務や更新制度よりも、自発的動機が学びを身につけるのに有効と考えられている。義務や更新制度が負担を増やす形とするならば、学びを継続するさまたげとなっている移動時間や時間帯に対して、オンラインでの参加機会の拡充や、講義動画などのアーカイブ配信を取り入れることで、学習者の負担軽減をし、学習を促すことも一つの形と考えられる。ただし、自らが主体となって学ぶ実習などは、対面での需要が多いことには留意する必要もある。

「僧侶の生涯学習について」の自由回答欄は、必須項目ではなく任意の回答とした、それにも関わらず262回答中111の回答があった。紙幅の都合上、すべての意見を載せることは出来ないが、ここに載せた各意見からは、生涯学習についての関心の高さや積極的な意欲が感じられるのではないだろうか。

「グリーンケアや寄り添いに関する意見」や、「社会性や倫理観に関する意見」も、「配信やオンラインを希望する意見」に次いで多い意見であった。Q6とQ7の回答数から考察して最終的にまとめた表が下記であるが、

1	悩み相談への対応力	192	123	-69	35.9%
2	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	191	122	-69	36.1%

生涯「学習」というと堅苦しいですが、柔軟な考え方をする意識をすることが生涯の学びに大切はスタンスだと思います。(40代、住職)

- 僧侶の役割を達成するために、「生涯学習」をしなくてはいけないという専門内の雰囲気造りが大切ではないか。(70代、住職)
- 宗教的な追体験や、経験が少ないと、それらがある人となない人では、話が噛み合わないと思います。若い僧侶には、そういった宗教的な追体験をして欲しいと思います。信仰と寺院運営のジレンマが大きいと思います。両方とも学ぶ場所が少ないと感じています。(40代、住職)
- 僧侶の学習も大事だが、寺族の学習機会が少ないと感じている(40代、住職)
- 僧侶になるための修行や学習と、住職として寺院を運営し、檀信徒に寄り添っていく為の修行や学習は自ずと違ったものになるはず。住職の資質向上は性急の課題である。(40代、住職)
- コロナを機にますます寺離れが進んでいる状態です。今私たちが何をすべきか今一度考えていかなければなりません(50代、住職)
- 「行学の二道」が基本。常に社会と向き合い、広く深く愉快な心持で、その変化に柔軟に対応していく。その為にはこの善き妙法を如何に知ってもらうか、観念的になり過ぎず様々な方法にチャレンジしたい。(70代、住職)

自由意見で、分類上最も多かった意見は「配信やオンラインを希望する意見」であった。

関連する質問項目ではQ8のどのような学習機会学びたいかについての問いで、オンラインでの講義(165回答、63%)、対面での講義(150回答、57.3%)と、講義については両方のニーズがあるものの、オンラインでのニーズがやや多い。実習では、対面(123回答、46.9%)、オンライン(53回答、20.2%)と、対面でのニーズがオンラインでの2倍以上となっている。

また、Q10の学習を継続していく上でのさまたげを問う質問で最も多い回答

(22) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

す。実践的な部分を勉強できる機会を増やしたいし、僧侶仲間と語り合いたいと思いますが、そういった本質的な部分に時間や気持ちを費やさないことがもどかしいです。(30代、修徒)

- 法務にあたっていけば自然と課題に直面すると思います。師僧以外にも、他の先輩諸師と気軽に話せる機会があれば課題解決に資すると思います。(40代、修徒)

人材に関する意見（3名）

- 地域には知識や才能、能力や意欲のある人が必ずいると思います。まずは日蓮宗僧侶から人材発掘して講師として活躍できるよう技能を育ててみるのはどうでしょう。(50代、住職)
- 一番の大きな問題は講師の立場の人たちの意識改革や資質が時代と如何にマッチングしているか、できるかが重要課題かと。教えを乞う立場は基本受け身である以上、昭和は勿論、平成からも一線を画し、令和の価値観に通ずる講師をいかに養成輩出できるか、鍵はここに尽きると考える。(60代、住職)

地方開催に関する意見（3名）

- 学べる場所を地方で定期開催してもらいたい。(40代、住職)
- 教師の数が減少し、教師の高齢化も進む中で生涯にわたってレベルアップを目指すことは今後の宗門にとっても大きな課題と感じる。学びはオンラインも有効だが、やはり実習では対面の機会が必要に感じる。東京などの大都市だけでなく、地方においても対面形式で学ぶ場所がもっとたくさんあってほしい。(40代、修徒)

その他、単一の意見など（32名）

- 僧侶の世界は上下関係が強いと感じますが、そのために新しい価値観が浸透しづらく、新しいことへの挑戦がネガティブに捉えられていると感じます。

義務に関する意見（4名）

- 生涯学習を「義務づける」（所定の講習を受けないと教師または住職資格を停止する）くらいしないと、教師の意識と宗門の体制は変わらないと思います。（30代、修徒）
- 学ぼうとする意欲を高めることも必要だが、強制的に学ばせる機会を作ることも必要になっていくと思います。（30代、修徒）
- 早く義務化したほうが良い。知識のアップデートが出来なければ社会と向き合えない。（40代、住職）

更新や特典に関する意見（3名）

- 僧侶は生涯に亘って行学の二道を続けなければならないという自覚が必要。教育内容については、教学に偏らず生活仏教に関する内容も学び、僧侶としての総合力をつけさせるカリキュラムが必要である。その上で、宗門としては個々の自覚任せではなく、教師資格更新試験などの創設（50代、住職）
- 信行道場終了後は学習を強要される事がないので、資格の更新制度などを取り入れる事で、教師の資質向上と宗門帰属意識を高めることに繋がると考えます。（50代、住職）
- 研修や学習に参加しない教師が多いように感じる。参加した教師に宗費や僧階昇叙の優遇をすることも考えた方が良い気がします。また更新手続きのような研修会も必要かと思います。（40代、住職）

交流に関する意見（4名）

- 様々な機会があるとおもいますが、他の僧侶、檀信徒さんとの出会いが一番の教材かと（50代、住職）
- 教区・管区の行事や事務などが多すぎると思います。同じ管区、教区の僧侶と話す機会があっても事務的な話や行事の打ち合わせをするだけで精一杯で

(20) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

の人たちに、また真剣に仏法、法華経を伝えたいと思う方々に適切な投資をして頂ければと願うところですよろしくお願い致します（40代、修徒）

- 古くからの伝承を大切にしながらも時代に応じた考えも取り入れられる柔軟性が必要である。但し、仏教徒、僧侶としての芯を通し抜く覚悟が基盤となる。そのためにもある程度の学習機会を設けていただけると有難い。（40代、住職）
- 自分で学習意欲があってもどこから手をつけていいのかわからない方もいらっしゃると思う。宗門からポータルサイトや日蓮宗新聞等を通して役立ちそうな資格やセミナー、書籍の案内があると良いと思う。（30代、修徒）
- 僧侶各人によって不得手とする分野があるので、それを補える学習の場を提供していただけると有難いと思います。（60代、住職）

教育や学習機会に関する意見（6名）

- 予算配分も含めて、教育を度牒から抜本的、包括的に見直す必要があり、小手先の研修や学習機会では解決する問題ではないと感じる。「人を育てる」ということにもっと時間とお金をかけるべき。（30代、住職）
- 度牒から僧道林までの間の教育空白期間の充実（50代、住職）
- 宗務院や寺院の講座・行事は平日昼間が多く、サラリーマン等の兼業で僧侶を行なっている場合には参加できる機会はほぼないかと思います。檀家が少ない寺院では兼業が当たり前になっている今、土日が忙しい専業僧侶と平日が忙しい兼業僧侶の学習機会の乖離を問題視してもよいのではないのでしょうか。（30代、修徒）
- 50で出家の機会を頂き、現在僧侶として仕事をしております。学ぶ機会について、体力的なこともあるのですが、宗門の公式な様々な学びの機会が、「60歳」くらいを機に、門前払いをくらうような状況にあると思います。思いや体力に自信がある方について、もう少し門戸を開いてもらえたらと思っています。（50代、修徒）

います。たいていは難し過ぎます。(60代、修徒)

- 自分が僧侶になった時に、お祖師様への御恩返しできる人間になりたいと思ったことを常に忘れずに日々を送ることが大事だと思う。そのためにはお祖師様の残されたご遺文を、しっかり学ぶことが大事なことだと思っています。(50代、修徒)

自主的な学びに関する意見（8名）

- 本来日蓮宗の僧侶なら一生行学二道に励まなければいけないのだから、誰に言われる事もなく自ら課題を見つけて学ぶべきだと思う（40代、修徒）
- 社会の動き、次々と起こる問題を身近な事と捉え、具体的に対処していくことで、自ずと学びが求められるものと思う。(60代、住職)
- 自ら望んでの講義は有意義と思う。住職となり管区の様々な会合や役目上の知識は学習するが、各種の修行機関にも行かない年齢になるとなお学ぶ機会はない。お寺と一般社会の方との隔たりは、ないようにしたい。(50代、住職)
- 諸々学びの場があるのはいい事で、当人が必要性を感じる事で物理的な制限が許す範囲において優先順位をつけ学ぶ機会を見つけていくと思う。(40代、住職)

学習的な支援に関する意見（7名）

- 近年多様な学習の場が提供されていると思います。種々雑多で選択に困るぐらいです。その中から良質な学習の場に意欲ある教師を導く手段が求められていると思います。(70代、住職)
- 若い方は問題意識を持ってもらうことがまず、第一かと思います。また、学びたいと思った時にお金や時間を気にすることなく、宗門からのバックアップがあればもう少し「やってみよう」という方が増えるのかもしれませんが。人材育成が本当に大切だと思います。難しい問題かと思いますが、これから

(18) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

(60代、住職)

- 積極的に臨床現場へ赴き、僧侶の社会的ポジションを獲得すべきと思います。

(50代、住職)

- 寺院僧侶がありがたくない、お経をあげてもらってもありがたくない…と、思われ、信頼されないことが問題。僧侶は普段の行動や人からの見られ方に気をつけて生活すべきところが分かっていない。

態度や言動で、逆布教（寺院離れをおこさせる行動）をしていることがあると認識させてやめるよう気づかせることが大事だと思う。傲慢な態度や言動。キャバクラ。高級外車。隠れてやって下さい。(50代、住職)

- 様々なタイプの僧侶がいて当たり前。ただし、ベースには僧侶としての倫理観が絶対に必要。(70代、住職)

- 私は一般市民の中で一般人のように活動してますと、寺院を核として活動されて居る僧侶の方には絶対に言わない苦言などの話をたくさん聞けます。

(70代、修徒)

- 生涯学習を続けていくのはどんな世界でも当然だと思われる。心配なのは日蓮宗の僧侶として持っていなければならない、教学や法式の知識、集団規範がすでに崩れかけているのではないかということ。資格さえ取れば良いと考える寺族、新教師が増える一方の中、生涯学習も勿論大事だが集団規範を如何に形成するか考えてもらいたい。(40代、修徒)

教学などに関する意見（9名）

- 法華経、日蓮聖人の教義、及び伝統的な教学の習得は必要であることはもちろんだが、それらを現代社会の現場と現代人の心に伝わるような実践教学、教義の応用、教学の現代化を図る事が更に求められていると思う。それらを体系化し、学ぶ学習の場を設けることを希望しています。(70代、住職)
- 教学知識の実践方法が難しい(60代、住職)
- 法華経や御祖師様の教えについてわかりやすく学べる機会があるとよいと思

グリーフケアや寄り添いに関する意見（10名）

- あいまいな喪失ケアを含む学びの場を提供していただきたいです。また、実践されている教師の方々のお話もお聴きしたいです。グループワークなどがあると有り難いです。（50代、修徒）
- 悲嘆ケアなど、体験的に学べる機会が欲しい。講義やグループワークだけではなく、実際の現場で体験的に学ばなければ、結局身につかないと思う。臨床宗教師研修は、本宗では行われませんか？（40代、修徒）
- グリーフケアやオープンダイアログ等を学びたいと考えているが、やはり都市部での開催が多い。講座等はオンラインでも可能だと思うが、実践形式のワークの方が、理解しやすく肌感覚で感じ得られるものもあるかと思う。（50代、修徒）
- グリーフケア、傾聴、臨終間際の方、遺族、苦難に苛まれる人に寄り添う力は法要式などと並ぶ宗教者として必須の能力と考えます。（30代、住職）
- 臨床宗教師などの資格を取れるように、宗門が後押しして欲しいです。（40代、住職）
- 檀家さん・信者さんを含めた一般の人たちの様々な悩みや心配ごとを私たち教師が親身になって聞き取り、寄り添うことが出来るかどうか重要だと思います。（50代、住職）
- 設問9「動議義付け」は、悲嘆の現場で感じる感性 設問10「学習の妨げ」は、現場で他者の痛みを感じない鈍感さ 設問11「寄り添えた瞬間」は、現場で遺族と共に故人に向き合えたとき
現場における感性を研ぎ澄ますことができれば、学習の必要なことがわかると思います。より実践的な実習の場があれば、教師の意識も変わると思います。（60代、住職）

社会性や倫理観に関する意見（10名）

- 世相や人心の変化に敏感に反応できるように常に学びの場が必要と考えます

(16) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

配信やオンラインを希望する意見（14名）

- 田舎にいると講座を受けるのが難しい。日蓮宗の各会で開いた講座や講義を YouTube なりどこかにまとめて見れるようにして欲しい。(40代、修徒)
- 教師用サイトでもいいので、どんどんアップロードして頂きたいです。それは Youtube のプラットフォームを使ってもいいと思います。(40代、修徒)
- 例えば CLEVAS 等の学習動画共有プラットフォームを利用することで、宗門や各ブロック、管区で行われた研修会の様子を動画で共有し、教師が閲覧することができればとても生涯学習のためになるのではないかと思います。(30代、住職)
- オンライン参加できる機会は今後も継続していただけるとありがたい。過去の講義や研修を観れるようにお手配をお願いしたい。(40代、修徒)
- 中央から離れた寺院でも学ぶことができていることに感謝しています。映像教材がさらに多く利用できるとありがたいと思います。(70代、住職)
- 健康面、経済的理由で学びに出かけるのが難しい場合でも、オンラインなどで学習できる機会があれば良いと思う。(60代、住職)
- 教師用サイトの「映像アーカイブ」コーナーはもっと活用できると思う。「アーカイブ」と言いつつ最近では新作動画を公開する場となっているように見受けられるので、「映像アーカイブ」コーナーを「生涯学習動画」コーナーとし、その中に、たとえば「宗学・仏教学」や「法式声明」、「社会貢献」、「寺院活性化」、「講義・講演アーカイブ」等のカテゴリ分けをしてはどうか。「グリーンケア基礎講座」があったらぜひ視聴したい。(30代、修徒)
- 大学の授業等をオンラインで学べると有り難いです。(有料視聴等) (50代、住職)
- 生涯学習ができる場所を、ネット上に開設することを希望します。オンライン講義のアーカイブがあると今後の宗門の教育資産になると考えます。(20代、修徒)

となる。これらは全回答者の内73.3%～55%の回答者が、「今、世間から求められている僧侶の重要な資質や能力」と認識しながら、学びの機会がない・少ないと感じており、学習機会がさらに求められていると言える。

また下位回答群ではあるが、「教学の応用力」も学びの機会がない・少ないと感じている回答者の割合は多く、学習機会が求められていると言えよう。

以上、Q6とQ7の回答を比較し、概観したが、最終的にまとめた表の各項目は、個人や社会に寄り添うような僧侶の理解力や対応力についてのものがほとんどと言える。逆に言えば、これらの学習機会が少ないままに、個人や社会と日々向き合い続けているとも言えよう。

選択肢として提示した15項目は、すべて重要な資質・能力と言えるが、この比較で浮かび上がっていない項目のほとんどは、すでに宗門大学や各研修機関において継続的に提供されているものでもあり、教師においても求める方の多くは、それらを活用し、必要な学びの機会を得ていると言えるだろう。

多くの教師が、「今、世間から求められている僧侶の重要な資質や能力」と認識しながら、学びの機会がない・少ないと感じている各項目については、継続的な学習機会の提供が課題になると考えられる。

自由意見の概要

本アンケートの最後に、「僧侶の生涯学習について」自由に意見を記述する欄を設け、全262回答中、111名の方から様々なご意見をいただいた。

複数ある同様な意見を分類し、その内のいくつかの意見を抜粋して以下に記す。(原文のまま、一部または全文を掲載) 分類しづらい単一意見についても、いくつかを抜粋して記す。

(14) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

11	教学の応用力	117	88	-29	24.8%
12	法人運営の知識	97	100	+3	3.1%
13	法式執行	85	24	-61	71.8%
14	ご祈祷	80	28	-52	65.0%
15	他宗教の実態や動向についての知識	73	100	+27	37.0%

Q6に対する下位回答群（11～15）の中で、Q7との差が50%以下のものは、

「教学の応用力」（24.8%）となり、一定程度、世間から求められる僧侶の重要な資質や能力と認識され、多くの方が、学びの機会がない・少ないと感じており、一定程度、学習機会が求められていると言える。

「法式執行」や「ご祈祷」は、一定程度、重要な資質や能力と認識されながらも、半数以上の方が、学びの機会がない・少ないとは感じていない。

「法人運営の知識」は、Q6回答数に比して、3%ほど、回答数が増えている。

「他宗教の実態や動向についての知識」は、Q6回答数に比して、37%ほど、回答数が増えている。

上記2項目は、重要な資質や能力との認識は一定程度であるが、Q6回答数に比して、学びの機会がない・少ないと感じている方が多い。

改めて、全回答中「今、世間から求められている僧侶の重要な資質や能力」と高い割合で認識される、上位～中位回答群の内、学びの機会がない・少ないと感じている項目について抜き出し、表にまとめると、

1	悩み相談への対応力	192	123	-69	35.9%
2	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	191	122	-69	36.1%
3	多様な価値観への理解力	158	106	-52	32.9%
4	宗教者としての倫理観	157	87	-70	44.6%
5	多様な病や障害への理解力	145	94	-51	35.2%
6	社会課題への対応力・実践力	144	119	-25	17.4%

いがたい。

6	多様な価値観への理解力	158	106	-52	32.9%
7	宗教者としての倫理観	157	87	-70	44.6%
8	多様な病や障害への理解力	145	94	-51	35.2%
9	社会課題への対応力・実践力	144	119	-25	17.4%
10	教学の知識・実践力	127	61	-66	52.0%

Q6に対する中位回答群（6～10）の中で、Q7との差が50%以下のものは、

「多様な価値観への理解力」（32.9%）、

「宗教者としての倫理観」（44.6%）、

「多様な病や障害への理解力」（35.2%）、

「社会課題への対応力・実践力」（17.4%）となり、

中程度の割合で、世間から求められる僧侶の重要な資質や能力と認識され、多くの方が、学びの機会がない・少ないと感じている。

特に「社会課題への対応力・実践力」は、Q6回答数中、83%ほどが、学びの機会がない・少ないと感じている。

上記の中位回答群4項目について、中程度、学習機会が求められていると言える。

ほとんどは、社会的な配慮に関する項目とも言える。他者の価値観や状況を理解し、宗教者として倫理観を大切にしながら他者と向き合うことは、良好な関係の構築や、宗教者として信頼を得る為に重要な資質や能力と言えよう。

「社会課題への対応力・実践力」は、上位～中位回答群の中で最も、学びの機会がない・少ないと感じており、学習機会へのニーズが高いと言える。

「教学の知識・実践力」は、中程度の割合で、重要な資質や能力と認識されながらも、半数以上の方が、学びの機会がない・少ないとは感じていない。

「法話」、「仏教の知識」と同様、宗内においても多くの学習機会が提供されており、学習機会がさらに求められているとは言いがたい。

(12) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

「今、世間から求められている僧侶の重要な資質や能力」と認識されながら、自身や次世代の僧侶にとって、学ぶ機会がない、学ぶ機会が少ないと感じているものについては、学習機会が求められていると考えられる。

1～5を上位回答群、6～10を中位回答群、11～15を下位回答群として分け、それぞれの特徴を述べながら、考察する。

1	悩み相談への対応力	192	123	-69	35.9%
2	一般常識・社会人マナー	191	93	-98	51.3%
2	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	191	122	-69	36.1%
4	法話	171	63	-108	63.2%
5	仏教の知識	159	46	-113	71.1%

Q6に対する上位回答群（1～5）の中で、Q7との差が50%以下のものは、

「悩み相談への対応力」（35.9%）、

「死別など様々な悲嘆への理解力・対応力」（36.1%）となり、

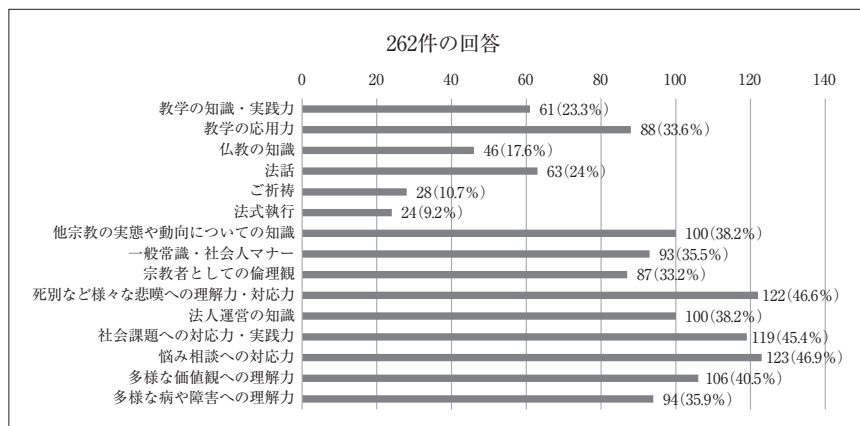
高い割合で、世間から求められる僧侶の重要な資質や能力と認識され、多くの方が、学びの機会がない・少ないと感じており、学習機会がさらに求められていると言える。

「一般常識・社会人マナー」は、高い割合で重要な資質や能力と認識されながらも、半数以上の方が、学びの機会がない・少ないとは感じていない。

日常生活を送る上でも、一般常識や社会人マナーは意識されやすいものと言える。形式的な要素が多く、インターネット検索をするなどでも、ある程度の問題解決が図れると考えられているのではないだろうか。

「法話」、「仏教の知識」は、高い割合で重要な資質や能力と認識されながらも、多くの方が、学びの機会がない・少ないとは感じていない。宗内においても多くの学習機会が提供されており、学習機会がさらに求められているとは言

Q7の回答結果は、



下記の表は、Q6の回答を数の多い順に並べ、Q6の回答数、Q7の回答数、Q6回答数とQ7回答数の差、Q6回答数に対する差の割合を配した。

Q6回答数順	Q6回答数	Q7回答数	差	Q6回答数 に対する 差の割合	
1	悩み相談への対応力	192	123	-69	35.9%
2	一般常識・社会人マナー	191	93	-98	51.3%
2	死別など様々な悲嘆への理解力・対応力	191	122	-69	36.1%
4	法話	171	63	-108	63.2%
5	仏教の知識	159	46	-113	71.1%
6	多様な価値観への理解力	158	106	-52	32.9%
7	宗教者としての倫理観	157	87	-70	44.6%
8	多様な病や障害への理解力	145	94	-51	35.2%
9	社会課題への対応力・実践力	144	119	-25	17.4%
10	教学の知識・実践力	127	61	-66	52.0%
11	教学の応用力	117	88	-29	24.8%
12	法人運営の知識	97	100	+3	3.1%
13	法式執行	85	24	-61	71.8%
14	ご祈祷	80	28	-52	65.0%
15	他宗教の実態や動向についての知識	73	100	+27	37.0%

(10) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

Q6－Q7回答数での考察

以下では、Q6とQ7の回答数の差を比較し、考察を加える。

Q6は、

今、世間から求められている僧侶の重要な資質や能力とはどのようなものだと思いますか？（複数回答可）

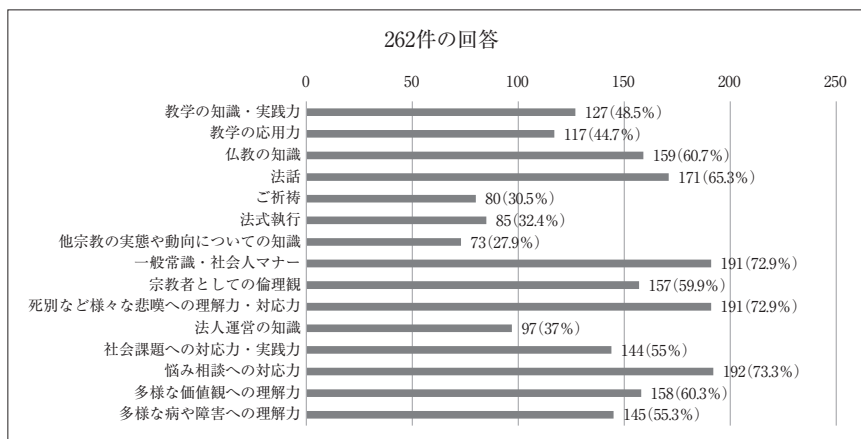
として、15項目の選択肢を用意した。現状で宗門から提供されている学習機会も意識しつつ、やや多く社会的に求められるであろうと思われる資質や能力を設定した。

Q7は、

それらの資質や能力のうち、あなた自身が、または次世代の僧侶にとって、学ぶ機会がない、学ぶ機会が少ないと感じるものはどれですか？（複数回答可）

として、Q6と同じ15項目の選択肢を用意した。

Q6の回答結果は、



ム上では全体のうち35.4%を占めるのに対して、本アンケートの回答者数では56.8%を占めており、システム上と比して、全体に占める40～59歳の割合が約20%ほど上回っている。グリーンケアPTで推進する企画のターゲット層が、若手住職世代の中年層であることを踏まえると、本アンケートにおける回答者の半数以上が、40～59歳の年齢層に分布していることは、ターゲット層におけるさらに詳細な分析を可能とする十分なサンプル数を確保できたという点で有意義であるように思われる。

また、その他に特筆すべき点として、70代以降の教師が、システム上では全体の31.7%を占める一方で、本アンケートでは全体の回答者のうち9.9%のみである点も留意しておきたい。この点については、告知・集計媒体がインターネット（教師用サイトの配信メール、GoogleForms）を介したものであったこととの関連も示唆されるが、その原因に関する詳細な検討は別の機会に譲ることとする。

以上、システム上と本アンケートの回答者における、年代別の分布の差異を概観した。その結果を簡潔にまとめれば、本アンケートの回答者の分布においては、システム上と比較して、40～59代の回答者数の割合が約20%ほど高値を示す一方で、70代以降の回答者数は約20%ほど低くなっているといえる。

●質問5、主たる呼称（住職・担任・教導・修徒・寄在）の別

本アンケートの回答者は、システム上と比較して、住職・担任・教導の割合が10%以上多い。システム上では住職・担任・教導と、修徒・寄在の割合がほぼ1：1であるのに対して、本アンケートの回答者は7：3に近い比率をとっている。

さらに、本アンケートにおける内訳に着目すれば、61.8%が住職、30.9%が修徒となっており、特に法務に中心的に携わっている「住職」が回答者の過半数を占めている。年代別に見た際、システム上と比較して本アンケートの回答者には中年層が多かったため、自ずと住職の割合が多くなった、という相関も示唆されるように思われる。

以上。

(8) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

◆回答者の属性に関する概要

以下では、本アンケートの質問1、3、4、5の回答結果と、教師用サイト登録者（母集団）のデータとを比較しながら、回答者の属性に関する概要報告を行う。適宜、前掲の「学習機会に関するアンケート」結果のグラフを参照されたい。

●質問1、教区・管区別の分布

教区・管区別の回答者数の分布について、システム上と比較して、本アンケートの回答者に見られる特徴を確認しておく。北関東教区と九州教区においては、システム上よりも、本アンケートの方が約3%、全体に占める回答数の割合が少ない。その一方で、中四国教区では、システム上と比較して、全体に占める回答者の割合が6%高値を示している。同様に、本アンケートの回答者の全体に占める割合が、京浜教区と中部教区では約2%高値を示し、山静教区では約2%、千葉教区では1.5%低値を示している。その他、北陸教区・近畿教区・東北教区・北海道教区は、システム上とアンケート上で全体に占める割合に大きな差はない。

この差異に関しては、教区における年齢分布や、インターネットを介したコミュニケーションツールの受容・普及率との関連が見出されるように思われるが、本アンケートの設問からでは詳細な分析が難しいため、ここでは分布の特徴を言及するのみに留めておく。

●質問3、性別の分布

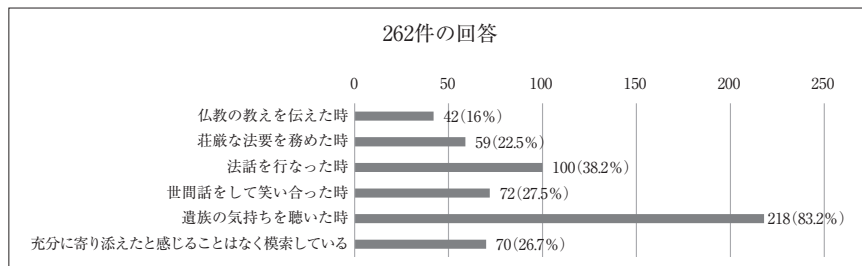
日蓮宗の教師数7596の内訳は、男性6778（89.2%）：女性818（10.8%）である。本アンケートにおける内訳は、男性230（87.8%）：女性26（9.9%）、無回答6（2.3%）であり、システム上の男女比とおおむね一致している。

●質問4、年齢の分布

回答者の年齢について、年代別に見た場合、20-39歳までは、システム上と本アンケートとで比率に大きな差は見られない。

その一方で、40-49歳と50-59歳については、顕著な差が見られた。システ

質問11、僧侶は、葬儀や法事場で、死別による悲嘆を抱えた遺族と接する機会が多くあります。遺族の悲嘆に寄り添えたと感じる瞬間はどのような時ですか？（3つまで選択可）



「学習機会に関するアンケート」

回答者の属性に関する概要報告

現代宗教研究所研究員

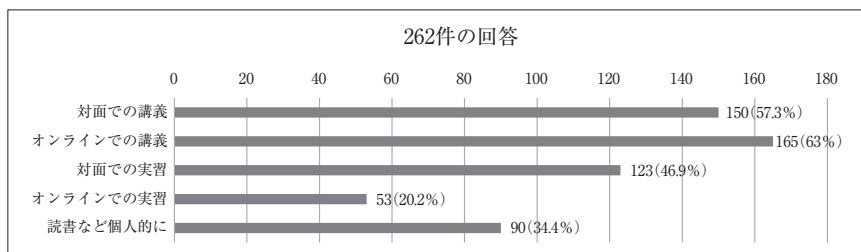
小高 絢華

◆本アンケートにおけるデータの信頼度

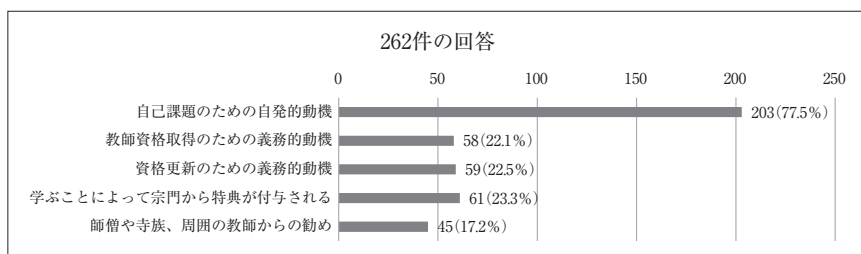
一般的に、ある母集団の傾向を把握するために、どのくらいの回答数（＝サンプル数）があれば良いのか、その妥当性を担保できる範囲は、「許容誤差5%」、「信頼度95%」であると考えられている。今回のアンケートで対象とする母集団の数は、日蓮宗のシステム上で登録されている教師数7596であり、「許容誤差5%」、「信頼度95%」の範囲は [262、366] である。本アンケートでは、有効回答が262であったため、この範囲（信頼区間）を満たしており、本アンケートの回答は、母集団を反映しているとみて良いと言える。つまり、本アンケート調査の分析は、日蓮宗の教師全体における「学習機会」に関する傾向を検討する上で有意義であると考えられる。

(6) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

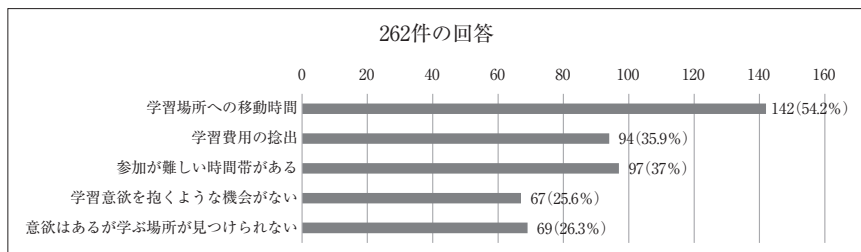
質問8、上記に回答したものを、どのような学習機会において学びたいと思いますか？（3つまで選択可）



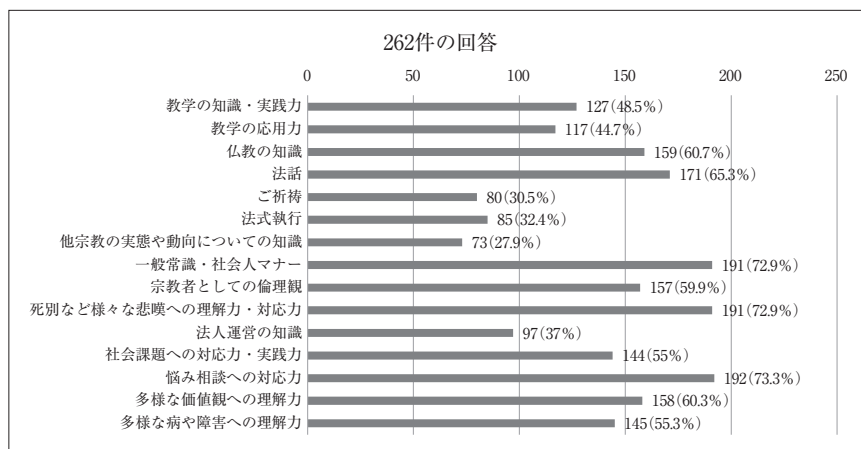
質問9、どのような動機付けが、学びを身につけていく上で最も有効だと思いますか？（2つまで選択可）



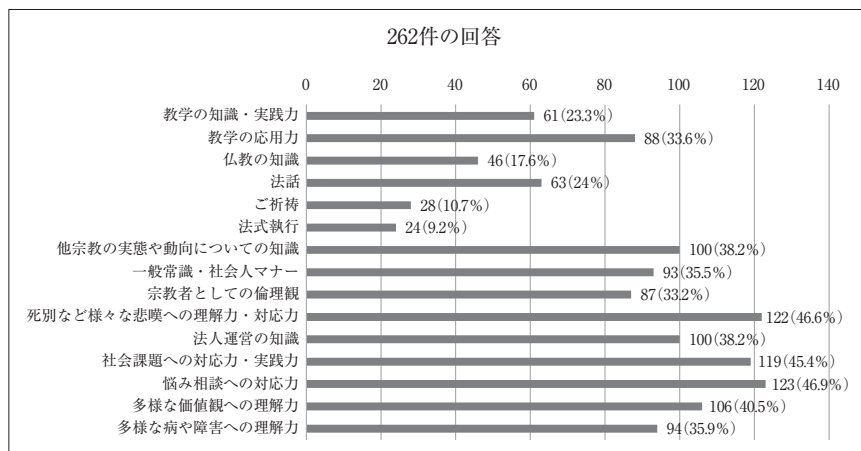
質問10、学習を継続していく上でどのようなことが、さまたげになると感じますか？（2つまで選択可）



質問6、今、世間から求められている僧侶の重要な資質や能力とはどのようなものだと思いますか？（複数回答可）

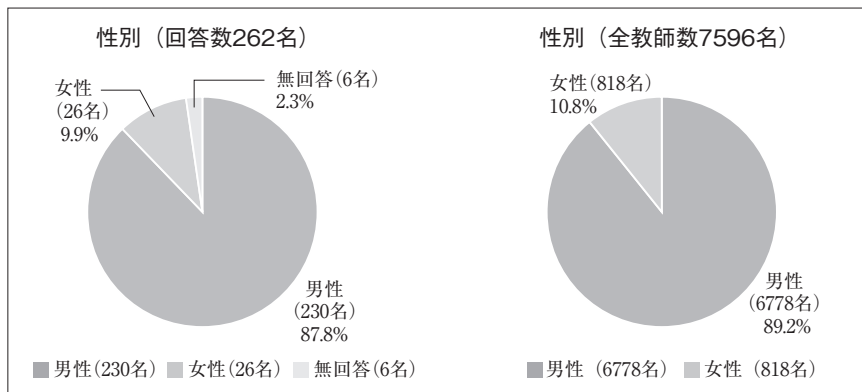


質問7、それらの資質や能力のうち、あなた自身が、または次世代の僧侶にとって、学ぶ機会がない、学ぶ機会が少ないと感じるものはどれですか？（複数回答可）



(4) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

質問3、性別



質問4、年齢（年代別に表記）

年代	回答数	%	全教師数	%
20～29	13	5.0	352	4.6
30～39	32	12.2	912	12.0
40～49	69	26.3	1363	17.9
50～59	80	30.5	1328	17.5
60～69	42	16.0	1236	16.3
70以上	26	9.9	2405	31.7

質問5、主たる呼称

	回答数	%	全教師数	%
住職・担任・教導	176	67.2	4070	53.6
修徒・寄在	86	32.8	3524	46.4

※ 回答者内訳

	回答数	%
住職	162	61.8
担任	4	1.5
教導	10	3.8
修徒	81	30.9
寄在	5	1.9

「学習機会に関するアンケート」結果

集計期間：2023年5月19日～5月31日

配布数：3410

回答数：262

質問1、3、4、5は、全教師数7596名の割合も記載（宗務システム参照日：2023年6月5日）

比率は、小数点以下第2位を四捨五入し、小数点第1位までを表示。

質問1、所属の教区はどちらですか？

教区	回答数	%	全教師数	%
京 浜	51	19.5	1300	17.1
千 葉	19	7.3	669	8.8
北 関 東	7	2.7	429	5.6
山 静	30	11.5	1020	13.4
中 部	22	8.4	481	6.3
北 陸	12	4.6	390	5.1
近 畿	35	13.4	1040	13.7
中 四 国	37	14.1	619	8.1
九 州	21	8.0	842	11.1
東 北	16	6.1	439	5.8
北 海 道	12	4.6	359	4.7
特 別 区	0	0	8	0.1

質問2、所属の地域はどちらですか？

	回答数	%
市街地（住宅や産業が比較的集中している）	107	40.8
郊外1（市街地から比較的近いが、人口は減少傾向）	99	37.8
郊外2（市街地から遠く離れ、住宅や産業はまばら）	56	21.4

(2) 学習機会に関するアンケート（グリーンケアPT）

質問は11問で、次の通りである。

1. 所属の教区はどちらですか？
2. 所属の地域はどちらですか？
3. 性別
4. 年齢
5. 主たる呼称
6. 今、世間から求められている僧侶の重要な資質や能力とはどのようなものだと思いますか？
7. それらの資質や能力のうち、あなた自身が、または次世代の僧侶にとって、学ぶ機会がない、学ぶ機会が少ないと感じるものはどれですか？
8. 上記に回答したものを、どのような学習機会において学びたいと思いますか？
9. どのような動機付けが、学びを身につけていく上で最も有効だと思いますか？
10. 学習を継続していく上でどのようなことが、さまたげになると感じますか？
11. 僧侶は、葬儀や法事の中で、死別による悲嘆を抱えた遺族と接する機会が多くあります。遺族の悲嘆に寄り添えたと感じる瞬間はどのような時ですか？

すべて選択肢の中から回答していただき、最後に、僧侶の生涯学習について自由に意見を記述する欄を設けた。

回答結果と「回答者の属性に関する概要報告」、質問六と七についての考察、自由意見の概要までを一次報告で扱った。それ以降が追加で行なった考察である。

研究・調査プロジェクト報告

「学習機会に関するアンケート」 まとめ報告

グリーフケアPT

日蓮宗現代宗教研究所「グリーフケアPT」では、令和5年2月に現代教化シリーズ3「GRANTHA「苦」に寄り添って」を発行し、各寺院に配布した。PTでは、僧侶によるグリーフケア（悲嘆ケア）が社会や檀信徒からより一層求められており、僧侶自身もその学びの機会を求めているのではないかといった視点に立ちながら、僧侶の「学習機会に関するアンケート」を行った。令和5年9月号「宗報」で、一次としてその結果を簡易的に報告した。「グリーフケアPT」は、現宗研研究員から、菊岡妙光、吉木祥介、齋藤宣裕、本間文裕各師、学識経験者として、星光照、高松由華各師、所員から鈴木智雄で構成し、一次報告にあたって現宗研研究員の小高絢華師に「回答者の属性に関する概要報告」の部分で、ご協力いただいた。

本稿は、その一次報告と、追加で行なった考察を合わせた、まとめ報告である。

アンケートは、日蓮宗教師用サイト登録者（3410名・令和5年5月31日時点）をサンプルとして、登録上のメールアドレスに直接送信して告知し、回答を募った。集計期間は5月19日から5月31日として、回答数は262となった。回答では、氏名・所属管区は問わずに、回答者の匿名性が保たれるように行った。PTとして独自の視点を持ちつつも、選択肢が偏らないように配慮した。アンケート冒頭で、人口減少による寺院規模の縮小、コロナ禍によっても加速する葬儀や法事の変容、「不当寄附勧誘防止法」によって宗教者への目線が厳しくなる可能性などに触れ、課題意識を持ってもらうように促した。